

わがいのち月明に燃ゆ

一戦没学徒の手記

林 尹夫



筑摩叢書 267

筑摩叢書 267

わがいのち月明に燃ゆ

一戦没学徒の手記

林 尹夫



筑摩書房

わがいのち月明に燃ゆ

筑摩叢書267

1980年6月25日 初版第1刷発行

著 者 林 尹 夫

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

発 行 所 株式 会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

電 話 東 京 (291) 7651 (営業)

東 京 (294) 6711 (編集)

振 替 東 京 6-4123

郵 便 番 号 101-91

© 1980 K, Hayashi

1033—01267—4604

多田印刷・永興舎製本

目次

第一部

第三高等学校	5
--------	---

京都帝国大学文学部	91
-----------	----

第二部

武山海兵团	103
-------	-----

土浦海軍航空隊	117
---------	-----

大井海軍航空隊	139
---------	-----

第八〇一航空隊—美保海軍基地	166
----------------	-----

付記

『ブッデンブローク一家』について……………	201
近代ヨーロッパ経済史ノート……………	205
回想に生きる林尹夫 林 克也……………	217
「若き二人のフィロローゲンよ」 大地原 豊……………	231

第一部

一九三九年（昭和十四年）、神奈川県立横須賀中学を卒業した林尹夫^{たなぶ}は京都第三高等学校を受験するにさきだつて、トーマス・マンの作品に傾倒していた。それらははじめ、マンの短篇集であったが、トニオ・クレエゲル、トリスタン、ルイスヒュンをへてやがてマンの評論や長篇へのはげしい関心に発展したとき、文学への志向が三高文科を受験する契機になった。

トーマス・マンは彼の思想的開眼の導きであった。人間の精神とは、生と死とは、そして何のために、いかにして人は生きねばならぬか、青年をはげしくとらえる想念が、思いきり、深く理解できるように外国文学書を読みたいという意慾になる。彼はこのため三高入学直後、病氣療養を理由として休学し、英・仏・独の研修に没頭するかわら、ドストエフスキー、ブルジョ、マルタン・デュ・ガールの作品を読む。とりわけ彼に決定的な影響をあたえたのがマンの『魔の山』、デュ・ガールの『チボー家の人々』であった。

両書は第一次世界大戦と青年の問題がテーマであるが、これが彼に歴史と人生、文学と生命という相い関連した課題を自覚させる。

まさに時は戦争の時代であった。昭和初期から日本は山東出兵、満州事変、日中戦争を経て、いま全面的な戦争に突入しはじめていた。一九四〇年こそ皇紀二六〇〇年と歓喜の声をあげたものの、五年後の無条件降伏が声なくひそかに近づいていた。

ヨーロッパでもヒトラーのナチス軍隊が東奔西走しつつ、闘えば勝つと錯覚しつつ墓穴の一步を刻んでいた。全ヨーロッパがふたたび戦火に包まれてゆく時代、このような状況を背景に、青春の自覚が、みずからの怠惰を鞭うちつつ、生きている時代の自己の存在の意義を探究しようとしたのがこの記録である。

時間的には一九四〇年四月から四三年夏にかけて彼が満十八歳から二十一歳まで（三高、京大）の日記である。

第三高等学校一年

昭和十五年四月六日

今や、私はまったく、自らの責任のもとに、自らを指導すべき位置に立っている。

私はこの栄光ある立場を検討して、真面目な、有意義なものたらしめてゆかねばならない。

そのために、英語（二時間）、独語（一時間）、思想の把握（二時間）、その他の学課を着実に勉強してゆくことにより、その責を為し得ると信ずる。英語、独語、思想の把握は、slow but steady（ゆつくりと、だが着実に）でやってゆこう。また学課は、毎日毎日疑問点なく理解してゆこう。べつに暗記する必要は全然ないのである。

充実した生活＋真面目な生活＋質の生活（だが肩の凝らない生活）

四月新学期の生活

英語自習 一週一五（一二〇）時間

一般的読書一週一五時間

計 三〇時間 一日約四時間

学校にて習得せしことは、その日のうちに疑問なきようにつとめる。

四月一日京に着いたが、何事につけても淋しい。やはり私は home sick ^{ホームシック} にかかつてしまった。……それほどでもないか!!

ぼつぼつ英語でも始めようと思うが、しかしなんとなく寂しい。

やはり兄は偉いと思った。東京にでて、経済的にも極めて不如意なとき、ひたすら学問にはげんだ兄は、いたずらな感情をのりこえて、はげんだのだ。私の手本とすべきものを持っている人だ。

東京の生活は愉快だった。家庭生活の醍醐味を満喫したものと言えよう。あの健全（一〇〇%までそうではないが）な生活は、今のぼくにとって、こよなき慰めであり、同時に励ましである。あれを一層、光輝あらしめ、高揚せしむるには、一にも二にも私の勉強なのである。わが兄、わが母、我に、そしてまたわが知人・知友に幸あらんこと

を、心から祈らずにいられない。実に第一に勉強、第二に勉強、第三に勉強が大事である。

誰か、立派な師を得たい。先生あんぎや行脚に出かけたいと思う。

いたずらなる home sick は去つて、本質的なものを把握せんとする意慾に力づけられてきた。一昨日、茨木いばらぎのM君を訪ねた。昨日は共に奈良に行ったが、雨に降られたので困った。帰途「Robin Hoodロビンフッドの冒険」を観たが、なかなかよかった。

夜、寢床でヘッセの『車輪の下』を読んだ。伸びようとする芽を、ことさらにゆがめて、型にはめこもうとする修道院教育に反抗して、伸びようとする若き魂ハムス。いつかは出でてみずから途を開き、Hans は不幸にして病を得、美しく儂はなき精神と肉体。あくまでも儂はなくその生を終るのである。その底を流れる無常感、成長の息吹き。げに美しくもはかない若き魂の成長、そして死への感銘。

人間に性慾がある。それは深刻な、重大な問題である。

いかにしてこれを是認し得るであろうか。我々は生きながらために食慾を是認する。何故に人は生きねばならないか。この点に関して、A教授の言は、あまりにも我々の心持ちとは遠い。厭世的な人には、生を鼓吹しえないではないか。

問題の中心は、「何故に、人は生くるか」ということである。このことが解しうるかぎり、食慾も性慾も、ある程度のは認を得るであろう。

恋、肉体のよろこび、これらはあまりにもぼくに遠い。ぼくは恋をおそれる。ぼくは肉体の結合を、清純に解し得られない。

恋とはMのような人へのみ可能な気がする。肉体の清純な結合、率直なる喜びは、gold hunt（黄金の探求）の境地である。ぼくからは、あまりにも遠いもののように思える。ぼくは友のうちで、Sをもっとも敬愛する。

しかし彼は、けつして私を敬愛しないであろう。彼は神秘だ。やはりそうだ。彼は、私が彼を敬愛するかぎり、永遠に神秘である。だが私は、常に彼の友人に値し得るよう、つとめてゆきたいと思う。ぼくは現在、なによりも第一に、友情に値すべく心がけているのだ。ぼくはけつして感情の弁護により、理性をくもらすようなことはしたくない。

四月十五日

自分をますますよく生かす。自分の仕事をますます完全に。この要求のない人間には、人間の意志が感ぜられない。

私は彷徨のすえ、もちろん、今も彷徨のさいちゆうであ
ろうが、私はとにかく現在、いかにすべきかにつき、明確
な認識を得ていると信ずる。ひとつには、英語の徹底的な
修得と、同時に自分を支持すべき理論の探究である。そし
てそれは、自由主義的なもの以外にないような気がする。
そしてそれらを研究し、自分の血肉たるべき思想の形成は、
私として、どうしてもやりたいことだ。私はその二つのこ
とに邁進することによってのみ、私の人間としての道があ
り、同時に、それなしでは、私の人間としての立脚点がな
くなってしまふ。すなわち一言にして言うならば、勉強と
健康のみが、あらゆる意味において、私を支えてくれるで
あらう。それなしで私は生きてゆけないのだ。

私はとにかく、自分の立脚点、出発点が得られたことを
よるこぶ。私は今後、ただ事実において、それを行いさえ
すればよいのである。自分をどうしても、もっと生かして
ゆきたい。心ゆくまで生きたい。すなわち、思う存分勉強
したいという慾求の、切なるあらわれである。

思考の浪費ということがある。ぼくの場合には殊にひど
い。たとえば、いったい何年ぐらい生きられるだろうか、
とか、落第しないだろうかなどということである。しかし

考えるまでもなく、これらは純然たる思考の浪費だ。前者
にしても、いたずらに心配しても無意味だ。それ以上に、
現在なすべきことに全力をつくして、すなわち衛生に注意
し、進んで体力増進をはかることが唯一最上の方法である。
後者にしても、いたずらに数学ができる、できないを心配
しても無意味だ。ただ現在、教えられたことを、充分に理
解してゆけばよいのである。それ以外、方法はないではな
いか。

しかしこれらのことを考えるということも、要するに頭
のなかが緊張していないせいだ。

ああ!! 緊張せずにいられないような師、友人を得たい。
またそれらに値するごとく、自己を高めてゆかねばならな
い。その意味においても、ぼくが現在、為し得ることは、
広い意味における勉強以外にない、と言ひ得るのである。
自己建設が第一だ。そして建設ということのみが唯一最高
の道である。

四月十六日

ぼくは建設、特に自分を知識的に建設することによつて
のみ、ぼくがあり得ると考えてきた。

しかしそれは、あまりにも事実と離れた空虚な飛躍のよ

うにも思われる。

いったい、人の身体が虚弱である時、その人は自己建設に参加できないであろうか。身体的水準の下落は、精神をも低下せしめるものであろうか。

具体的にぼくはいま、自分の身体が不安だ。そしてこの不安のために、ぼくは何もできないのだ。種々の妄想に悩まされているのだ。妄想は妄想を生む。そしてこれら大量の妄想を背負ったまま、いかに進むべきか、その道を失ってしまっているのだ。その努力が湧いてこなくなってしまうのだ。

ぼくみたいな人間は、ただ、努力することにより、中心ある生活が為し得るのだ。それゆえ、ぼくにおいては、とにかくなんらかの自分のものを持って、その建設に努力することがないとするならば、ぼく自身の破滅とならざるをえない。ゆえに現在、為すべきことは、身体を強健にすることに専心すべきか。換言するならば、ぼくは第一に養生をして、身体をまず健康にすべきであらうか。あるいはまた、精神的基盤の確立にのみ、つとめるべきであらうか。

事を一時に為すは、あるいは不可能かもしれない。しかし現実において、これは常に要求されるのだ。すなわち私に、現在為すべきことは、二事を一時に為すことだ。そし

て、その範囲内で、ただ努力する以外に道はなく、またその結果、身体的に挫折するに至っても、やむを得ないのだ。私はただ、敬虔なる気持をもって、二者の調和につとめる以外、道はない。それ以外、いったい何を為し得ようか。またその範囲内において、最善をつくすべきであることは言うまでもない。それ以外は、私の為し得ざるところだ。一見、不可能と見えることにたいした場合は、二つの態度をとる。一つは祈ることだ。一つは祈らぬことだ。前者にはまた二つある。

その一つは「これ以上、私はどうにもできない。神様、どうか助けてください」と悶えることだ。他の一つは「神様、あなたにおまかせします」と考え、平然としてしまうことだ。

ぼくとしては、少くとも自覚的には、肯定と否定のいずれとも決めかねる。概念的には種々あげうるであろうが、その理由を、自ら湧きあがってくる愛をもって、完全に理解することは、ぼくにはできない。

神に縋りたい。しかしぼくは縋れない。安心立命の境地に立ちたい。しかもぼくには達せられない。

ぼくは、要するに、自覚的に、いずれとも決定できない。ただ、それらの具体的な解決として、みずから全力を傾く

るに足るものを、まず勉強してゆくことだ。それは一面において、ごまかしかもしれない。しかし、みずから真実に満足できれば、それだけでよいのである。

なんととなれば、深刻な内面的苦悶は、あらゆることによつても、防げないのであるから、たんなる勉強ではさげられない。そうと知ったあとだって遅くない。

なんととなれば、勉強によつてはじめて、同じ苦悶でも、心の深奥から発するものと、生の倦怠から生ずるものとは、節をかけられるからだ。その意味で、ぼくが勉強をするということは、ぼくが本当の道を進むために、なくてかなぬものだ。

ぼくは勉強と健康のため、次のことを実行する。

一 衛生に注意する。

二 休み時間は外に出る。

三 できるだけ歩く。

四 夜、十一時までねる。

五 それ以外、家、その他においては、常に勉強する。

四月二十二日

我々が学問をするのは、それによつて、それを通じて、我々がもっともよく生かされると信ずるが故である。

学問を修得することは、人間として純粹に知識を憧憬するの念に基づいている。その純なる流露に基づいている。

しかしてそれは二つに分かれ、純粹に知識を吸収するのと、一方また、得た知識、すなわち学術により、それを手段として、実社会において活動し、自己の向上と同時に、社会の向上を目的とするのである。

しかして学問を修得することにより、我々は知識を得るにとどまらず、人間として鍛錬されるのである。知識を得ることと、人間として鍛錬されることは、別個に行われるものでなく、一つの活動の、一つの結果の両面なのである。また、そうあるべきである。

たとえば自然科学等の対象は、主として人間の心や人格とは関連をもたない。しかしながら我々は、それを研究することにより、我々の人格を鍛える。社会科学また然り。いわんや哲学、倫理学においてはなおさらである。

(四月中の読書整理と計画)

(1) 四月中に読んだもの

黒い眼と茶色の目(徳富蘆花)

車輪の下(ヘルマン・ヘッセ)

愛と認識との出発(倉田百三)

春の水（ツルゲネーフ）

ボヴァリー夫人（フローベル）

デミアン（ヘルマン・ヘッセ）

額の男（長谷川如是閑）

② 読みたいと思う本

第一学生生活。第二学生生活。社会思想家評伝。書齋の窓より。感傷と反省。文学の周囲。時局と自由主義。ファシズム批判。トマス・ヒル・グリーンの思想体系。（以上、河合榮治郎氏）

生活・哲学・芸術。日本人の心。（以上、谷川徹三氏）

漱石全集（天野、安倍、長与）。

五月五日

いままで、読書して得たるものはほとんどないと言つてもいいくらいだ。一つには真の良書に接し得られなかったためであるが、同時におちついて、じっくり書物を読まなかったせいでもある。ぼくは元来、時間的にすくないものであるから、できるだけ時間を有効に用いねばならない。同時に書物は、なるべく自分で買うことにしよう。それがぼくたち、時間不足者のなすべきことだ。じっくり腰を落着けて読みたいと思う。種々のことを為し得るであらうが、

まずぼくのなすべきことは、徹底的に読書せねばならないということである。

五月六日より、このノートに感想を記し、別のノートは読書録として忠実に記載しつつ、厳密なる自己反省をなしでゆきたい。

ただ、徹底的に努力することのみが、ぼくを生かすことだ。slow^{スロウ}でよい。しかもsteady^{ステイディ}でなければならない。往々にしてslowだとloose^{ニューズ}になるのは、厳に注意すべき点である。

人と話しをすると、だれでも正しいことを言う。重要なのは、それをたんなる言葉にとどめず、着実に実行することである。

淋しいのは、友達のないことだ。home sick^{ホームシック}にならず、また、家に帰りたいとも思わないが、真の友人、真の先生に接したいと思う。しかしそれらの前提として、まず自己を充実させることだ。換言するならば、徹底的に読書することにほかならない。

淋しくとも我慢せよ。そうして、ひたむきに読書し、充実した生活を開拓してゆこう。なお今日は、一種のturning point^{ターニングポイント}（転換点）たるべき日だ。クラス・コンパがある。行ってみようと思う。そして明日より、徹底的に頑張ろう。

しかし神よ、願わくば、私に健康を与え給え。

五月七日

私が身体的にどの程度まで耐え得るか、それは疑問である。げんに私は、倒れつつあるのかもしれない。しかしその点を心配すれば、*sanatorium* に入る以外、なんらの道はない。しかしそれは絶対に不可能だ。よしんば可能であっても、ぼくは嫌だ。ぼくはいま、自分の力になる道を進まずに生きることはできない。私の勉強は、私の生死の、かけがえない代償である。どうしてそれをおろそかにしてよからうか。私は刻苦勉強せねばならない。

私はいま、価値批判の標準たるべき理論の探究につとめているが、どうしてよいか判らない。しかしこれを人に聞いても無理かもしれない。みづから苦しんで探さねばならない。『車輪の下』のギーベンラートの運命は、たんにギーベンラートのそれではなく、我々のそれである。我々は多くの人が、学窓と社会とで、批判の標準をまるで無視してしまうのを見る。そのうちには車輪の下に押し潰された者もある。私とて、いま一人で放り出されたら、もちろん踏み潰される。また現在、この標準を定めずして、いつの日に可能であろうか。努力せねばならない。

S君に会ったら（五月五日）、『車輪の下』は良い、と言っていた。さもありなん。私はM・S君に接することにより、多大の鼓舞と反省を受ける。得難い友の一人である。今後の予定　ヘッセ。プラトン。James Joyce “Portrait of the Artist as a Young Man” <ヘイムス・ジョイス『若き日の芸術家の肖像』>

五月十五日

コリンヌ・リシュエール「格子なき牢獄」を観る。最近、感受性がなくなつたか、などと考えていた際なので、非常に嬉しく、心を動かされた。明日もう一度観にゆくつもりである。なぜならば、友人と一緒にのため、いささか感興をそがれたからである。

私は友情にたいし精神的な vibration (振動) の resonance (共鳴) を期待するものであるが、残念ながら、これに該当する人はいない。

片々たる友情にまつわることをやめ、孤独に沈潜しよう。浮薄な虚飾をさけ、根底的な実態の創造に努力しよう。一人は寂しい。しかしだれとも交際しまいい。一人で立て籠ろう。ただS先生にだけは御指導を受けたい。それからK氏である。それ以外は少くとも、現在は無意味な交際である。

独りに徹しよう。それに徹底することにより、普遍的な

「あるもの」を把握してゆきたい。

実際の生活の上にも Individualism (個人主義) をあらわしてゆきたい。S 君と接したいのは山々だが、しだいに彼から離れつつあることは明白だ。彼があまりにも bosom door (胸の扉) を固く閉ざして、我々を shut out しているからかもしれない。彼との接触により、なんら mit (と共に) はありえない。しかし私は彼を愛さねばならぬ。彼をして French^{フレンチ} ならしめねばならぬ。

五月二十三日

昨日ハイキングに行ったが、歩きすぎて疲れた。ぼくたちには、習慣的な勉強をするのが肝要、今後は習慣を害するようなことは絶対に避けよう。そのために今度、時計を買おうと思う。

毎日の勉強 (1) 英語 五頁宛

(2) 和書 一〇〇頁宛

欠かした分は記入して、夏休暇中に補う。

精神生活は outward (向きの) な創造の生活と相補の関係にあると思う。すなわち我々は、たんに精神生活に生

きるということだけを目標になし得ないと思う。ひたすら創造に生きるという生活こそ、両者を結合した生活ではないか。創造に生きるとは、たんに進むだけではないと思う。それは反省と努力の結合であると思う。すなわち What should I be? (我らいかにあるべきか) と、What should I do? (我ら何をなすべきか) とでは、前者が後者の前提たるべし、というだけの関係以上に、両者はいずれを先にし、いずれをあとにするか、などということではなく、実践問題としては、一を行うことにより、二つながら果せるのではあるまいか。

ぼくの高校時代の目標

一 読まねばならぬ図書

(1) 和書 三百冊

(2) 英書 十五冊 (一日四頁)

二 英語を日本語なみに読めるようにする。

三 体力を増進する。一日最短三〇分運動する。休憩時間は読書しない。積極的に運動する。

六月十五日

美しき山が、京都を、幾重にもとりかこむ。その山々は、

したたるようなアンブルな緑に盛りあがっている。その上の青い空に、雲の塊りがいくつも飛んでゆく。

夏は暑いが、しかし、なんと美しいではないか。生々^{いっさい}と生成の美しさに輝やいているではないか。夏はもともと美しい時だ。

私はどうしても生きねばならない。充実した潔く美しい生を開いてゆかねばならない。自分の尺度を持つことだ。

自分の足場がなければならぬ。

生活の充実も、足場の確保と、そのための健康と、自分の好きなことをやる、そしてそれにより、快活になることで、可能になる。このために

(1) 一般的教養。

(2) 英仏独の三カ国語の充分な修得。

(3) 健康。

を絶対に、養成せねばならない。

映画はむしろ避けるべきだ。なるべく行かないようにしよう。河合さん^(河合衆 治郎氏)は高校時代には、人生観を確立し、自己をみつめる生活だ、と言うが、あまりにも抽象的で、のみ込めない。要するにやり甲斐のあることをやるだけである。

応援団の檄に曰く。「真に徹底……純粹な……永遠な……たくましい……燃えるような努力……」なんていやな言葉であろう。生活において、それを実行している人は、けっしてみずからそれを意識しない。

六月二十三日

私は常に友を求める。友は闊い^{くわい}の人生（であろうと思うが）における唯一の慰めではあるまい。奮起の源泉であるまいか。

私を、ただ一人信じてくれる、そして信じられる友がほしい。それは私の、なくてはならぬものだ。私は友を、その価値において尊敬したい。笑える友、泣ける友、彼を前にしては、真面目にならずにいられないような友を、衷心より求める。

しかし友達ができることは、実に運命的なことだ。我々は、友なきことを悲しみつつも、ただ拱手傍觀^{きうしうぼうくわん}以外に道はないのだ。まずみずからを充実させて、みずから誇るにたる人格と教養をつちかうことのみが、我々のなし得ることである。

それならば、教養とは何か。しかも私の全行為の集積は、いったいいかなる点から、価値批判されるべきであろうか。

この問題を考える時、そして、あらゆる問題を考える時も
そうであるように、私はいつたい、人はいつたい、何故に
生きるのか、という問題を、まず考えねばならない。私は
この問題が、はたして可能か不可能かを知らない。

『人類の意志について』にあるように、「世界が、しかし
て人類が、rising tone（上り調子）にあるがゆえに人類は完
成の意志を持ち、その course に進む。それゆえ、我々人
間は、その有機体の一微小な moment として、みずから
において、その意志を顕現せねばならない」ということが、
どうしても呑み込めない。

私にとって、人類の意志のいかんよりも、まず自分の存
在というほうが、呑み込みやすい。なんといつても、そし
てその過程はともかくも、私は事実として存在する。しか
してこれは、不動の現実である。

私は元来、実践者であつて、批判者ではない。私はまず、
創造ということを重んずる。しかしして批判者は、その裏付
けにすぎない。けつしてそれ以上のものであつてはならな
いと信ずる。

しからば創造とは何か。それは自己形成である。あまり
にも抽象的なことであるが、ヘッセの「私は自分のなかか
ら独り出てこようとしたところのものを生きよう」とする

ことが、自己形成ではあるまいか。

試験前三日、しごく呑気である。ある規定のもとに、自
分を規律してゆくさい、我々は、ややともすれば specialist
（専門家）的態度に陥りがちである。それは非常に恐ろしい
ことだ。

自分をもつとも本質的なもので、人類に貢献するとして
も、それは彼が他の面において、怠惰でよいことではない。
他の面に、無関心であつてよいということではない。「本
質的な」と思われる道において、彼が誠実であると同時に、
自分の行為が、すべて愛のあるものでなければならぬ。
すなわち人間は、一つに誠実だからといって、他をほっぽ
らかしてよいものではない。その一つが、はたして、彼の
最善の道であり、彼の人格を全的に表現するものとは限ら
ないからである。

いかなることにおいても、もつとも明白に、誠実に、自
分を表現すべくつとめるべきだ。これと思う道に、一〇〇
%の力を傾倒すべきであると同時に、これと思わぬ道にも、
一〇〇%の力を尽すべきである。

人間は先ず、specialist たらん、より以上に、まず dilem-
tante であらねばならぬ、と思うのである。